

第 37 回国際胚移植学会報告書

東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻 村木美帆（実験動物）

【1、学会に参加した理由】

今回、第 37 回国際胚移植学会（37th Annual Conference of the International Embryo Transfer Society、2011 年 1 月 9 日～12 日、フロリダ州オーランド）にて以前から取り組んできた生殖細胞の老化における分子メカニズムに関する研究の成果（Glutathione S-transferases theta1 (GSTT1) is differentially regulated from other GSTs in granulosa cells.）をポスター発表にて公表するとともに、発生生物学における最新の情報を入手し、今後の研究の進展に役立てることを目的とし、同じ研究領域の研究者らと討論することにより、英語によるコミュニケーション能力の更なるステップアップを目指した。

【2、学会の様子と内容】

私は本学会に参加するのは初めてで、海外ということもありかなり緊張して向かった。オーランドへは日本からの直通便がなく、シカゴ経由で 18 時間もかかってようやく到着した。オーランドは冬でもかなり暖かいところと思い込んでいたが、今期、世界中で大寒波が来ているせいもあり、普段より気温が低く、日中は 23～24 度まで昇るが朝晩は冷え込み、5～7 度くらいで、東京とあまり変わらない



気温で、薄着ばかり持ってきた私にとっては少し辛いものだった。学会場はオーランドの中心部にある「ウィズダムオーランドリゾートホテル」で、リゾート感満載のホテルの一部を貸しきって行われた。本学会は、年に一度開催される大会で、胚移植に関わる約 500 名の研究者が世界中から集まり、さまざまな分野の研究や技術についての情報

交換の場となる。学会期間中にはいくつかのレセプションも催され、希望した参加者が集い懇親を深める場もあった。

メインプログラムは、7つのセッションに分かれていて、セッションⅠは「貯蔵卵胞について (Follicular Reserve)」、セッションⅡは「成長因子と卵胞の発達について (Growth Factor and Follicular Development)」、セッションⅢは「in vivo 及び in vitro における最新の凍結法について (Recent Advances in In Vivo and In Vitro Cryopreservation)」、セッションⅣは「家畜の遺伝子操作技術について (Genetic Engineering of Livestock)」、セッションⅤは「エピジェネティクスからエピゲノミクスへ (From Epigenetics to



Epigenomics)」、セッションVIは「生殖におけるセンサーや機能における分子機構 (Molecular Networks as Sensors and Drivers of Fertility)」、セッションVIIは「その他の課題や取り組みについて」としてそれぞれの分野の代表的な研究者が講演を行った。今年のパイオニア賞を受賞したのは、クローン技術により1997年にクローン羊『ドリー』を誕生させたことで有名なIan Wilmut博士であった。彼は哺乳動物の胚の凍結保存法を発展させ、世界中に広めた先駆者である。またクローン胚の発達を制御するメカニズムの解明や、核移植の効率化を図り、ヒトへの治療、家畜動物のクローン化や改変に期待が寄せられている。今回、クローン技術の創設者としてその功績を称えられた。

私が参加したポスターセッションは339題あり、一つの大きな広間で行われ、I、IIの2日間で行われた。分野はそれぞれ、クローン/核移植、卵子成熟、遺伝子発現、胚培養、体外受精/体外胚生産、胚操作や胚移植、過剰排卵処理、遺伝子発現などと細かく分かれており、私は遺伝子発現分野で発表を行った。私が注目している遺伝子は『Glutathione S-transferases theta1』という遺伝子で生殖細胞に及ぼす影響については未だに報告がないため、あまり信用していない研究者もおり、研究の流れについて説明を行なった。残念ながら期待したほど良い質問は来なかったが、自分の研究について討論ができ良い経験となった。また、他の研究者のポスターを見ると、似たような実験でも、それぞれ方法に違いがみられ、自分にも応用できそうなものは今後の実験に取り入れてみようと思った。

【3、感想】

今回の学会に参加することにより生殖生物学に携わる研究者がどのようなテーマでどういったものに着眼して研究しているか知ることができた。また、多様な生物種の生殖学に関する研究報告がなされ、繁殖的側面から多種の生物種の生態系を理解し、それについて考えを巡らすことができた。自然生態系を維持するにあたって生殖生物学の占める割合は大きく、今後ますます重要になってくると思う。また、他の研究者の発表は論文で読んで理解するのは一風変わって、実際に研究に携わっている人に直接話しかけたり、どのような人が研究に携わっていたりするのか観察できる点はとても興味深かった。今回の国際学会において、日本で行われる学会とは異なり世界規模の大きさを改めて体感し、外国の研究者とのコミュニケーションを通して、英会話のトレーニングにも繋がると同時に、自分も日本の一研究者としての重さを改めて自覚することができた。また、オランダに来て思ったことだが、比較的日本人の観光客が多いということを知った。ホテルにはなかったが、観光施設によっては日本語のパンフレットもあって正直驚いた。オランダに限らずアメリカ人のほとんどに当てはまると思うが、元気にあいさつをしてきたり、目的地までの行き方に困っていると気さくに話しかけて教えてくれたりと、とても親切な人が多

いことに感動した。全体を振り返って、学会場以外の場でも外国人の方とコミュニケーションがとれたことが本当に良かったと思う。次回はもっと英語力をあげて、アメリカに限らず海外で研究発表を行い、研究者としての資質の向上に努めたいと思う。